

解説 — 讚仏偈について —

財団法人芦屋仏教会館理事 瓜生津 隆文

『無量寿経』の上巻に出る四言八十句からなる偈文で、「嘆仏偈（歎仏偈）」とも言います。かつて世自在王という名の如来が世に現れた時、その説法を聞いたある国王が、国と王の身分を捨てて修行者となり、師である世自在王仏のもとで願を起こすにあたって述べた偈頌、という構成をとります。法蔵と名を変えた修行者が、師仏である世自在王仏の徳を讃える言葉で始まりますが、内容的には、広く仏徳を讃えたものであり、さらに法蔵比丘が、自らも大いなる徳を備えた仏となることを志し、しかも諸仏の国を凌駕する国土を打ち立ててすべての衆生を収め救う旨の誓いを立て、師の証明を請うというふうに展開しています。したがって内容の点から言えば、「誓いの偈」とも言えるものです。

前半部分で仏の徳を広く讃えているという点で「讚仏偈」という名称は当を得たものと言えますが、これを単に、世自在王仏の徳を讃えた「讚世自在王仏偈」と見るならば、讚仏の内容も、我々とは直接には関わりのない彼方の話となってしまうます。また逆に、法蔵菩薩を、自らの内面的真実の象徴と見るならば、阿弥陀仏（および浄土）を内在的に見る自性唯心の邪執として退けられましょう。法蔵菩薩の偉大なる決意の表明は、他力の救いをまっすぐに仰ぐ者にとつては、頼もしくも慕わしい生きた文言であると同時に、その言葉には、大乘仏教の核心とも言うべき菩薩の勇猛心、利他の精神が力強く脈打っている点にも心を向ける必要があります。